

## Special Essay

### 若い世代に勧めたい一冊

生理学講座（統合自律機能部門）

鷹野 誠

電子ジャーナルが普及したおかげで図書館へ行く機会がめっきり少なくなった。今や図書館は学生の勉強部屋としての機能のほうが主体なのかも知れない。学生時代、劣等生だった私が図書館へ行くときは、講義をサボって勉強とは関係のない本ばかり読んでいた。昔は教養課程がまる二年間もあり、今とは比べものにならないくらい自由な時間に恵まれていたと思う。当時のQ大教養部にはO先生という名物教授がおられた。旧制高校の卒業生に特有な懐の深さをもつ、粹な先生だった。定年退官後、短い期間ではあるが本学の附属高校で校長をしておられたので、ご存じの方もいらっしゃるかも知れない。O先生のユニークな講義は今でもよく覚えている。講義の冒頭に本を一冊紹介し、その内容を下敷きにして動物行動学とか生理人類学の話をするのであるが、生命科学から人文科学、はては南極探検の思い出話まで、専門領域にとどまることのない話題が次から次へと溢れてきて、退屈する暇のない講義だった。O先生の講義には遠く及ばないものの、拙稿でも真似をして一冊だけ本を紹介してみたい。

若い世代の方は、中谷宇吉郎という物理学者をご存じだろうか？寺田寅彦の弟子で専門は雪氷学。紹介したいのは、有名な随筆「雪は天からの手紙」ではなく、「科学の方法」という岩波新書に収録された一冊である。冒頭、「科学の限界」「科学の本質」から説き起こし、「解ける問題と解けない問題」「科学における人間的要素」まで、実に明晰な思索が平易な文章で書き綴られている。初版は1958年、もはや古典の範疇に入る本かも知れないが、内容は色褪せることなく、今なお刷を重ねている。私は学生時代にこの本に出会えたことを本当に幸運だったと思っている。「人間的要素」の章に出てくるミトゲン線の騒動は百年近く前の話らしいが、現代でも、悪意の有無にかかわらず、同様の過ちを犯す可能性があるような気がしてならない。トップジャーナルでのデータ捏造問題が世間を騒がしたのは記憶に新しい。今一度、我々が依って立つ「科学的方法」の本質について理解を深めておくことは意味があると思う。試験前の時期なのか、遅くまで図書館で勉強する学生の姿をよく見かける。学生諸君は勉強の合間の気分転換に、そして新たに研究活動に入る若いドクターにも、ぜひ本書を一読されることをお勧めしたい。

